体験者の約4割が職務効力を実感

パーソル総合研究所「ワーケーションに関する定量調査」

パーソル総合研究所（東京都港区、萱野博行社長）は9月12日、6月に実施した「ワーケーションに関する定量調査」の結果を発表した。これによるとワーケーション経験者の約4割が、ワーケーションでの経験が仕事上で生かせるとのメリット「職務効力感」を感じていると分かった。

調査は今年6月5～13日に調査会社モニターを使ったインターネット定量調査の手法で実施。スクリーニング調査は、従業員数10人以上の勤務先に勤める全国の20～69歳の男女10万9034サンプルについて実施。本調査は直近半年未満にワーケーションを経験した人3500サンプル、ワーケーション未経験の人1千サンプルを対象に実施した。

調査によると、観光庁のワーケーションの定義である「普段の職場や自宅とは異なる日常生活圏外の場所で、仕事（テレワーク）をしながら自分の時間も過ごした」経験があると答えた就業者は17・4%だった。内訳は、個人ワーケーションが67・6%、組織などで行うグループワーケーションが32・4%。

仕事環境の満足度 主観的生産性を左右

ワーケーション・旅行中に感じたメリットについては、観光群よりもワーケーション経験群の方が、15ポイント以上職務効力感を感じていた。この他、「自己拡大」についてもメリットと感じている人が観光群に比べて多かった。一方で、「関係強化」「健康回復」については、観光群の方がメリットとして感じている人が多かった。

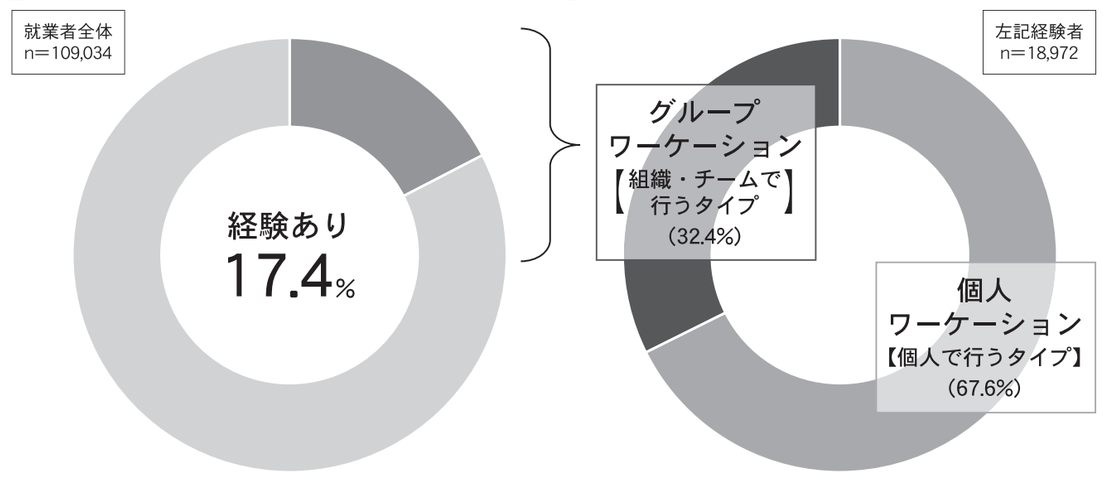
同調査ではワーケーション中の主観的生産性についても調査。ワーケーション期間中は普段の仕事の出来と比べて6～7割の生産性しか発揮できていないと分かった。

ワーケーション中、仕事上での不満を感じた人は、約6割。具体的には個人、グループのいずれについても、「仕事する場所への移動がしにくかった」が最も多く、次いで「ミーティングができる場所がなかった・少なかった」が多かった。

主観的生産性と仕事上の不満点との関係の分析では、個人の場合は「ミーティングできる場所の無さ・少なさ」「仕事する場所の不清潔感」、グループでは、「仕事する場所の費用」「周りに話しかけられて集中できない」が、主観的生産性を下げている傾向が見られた。

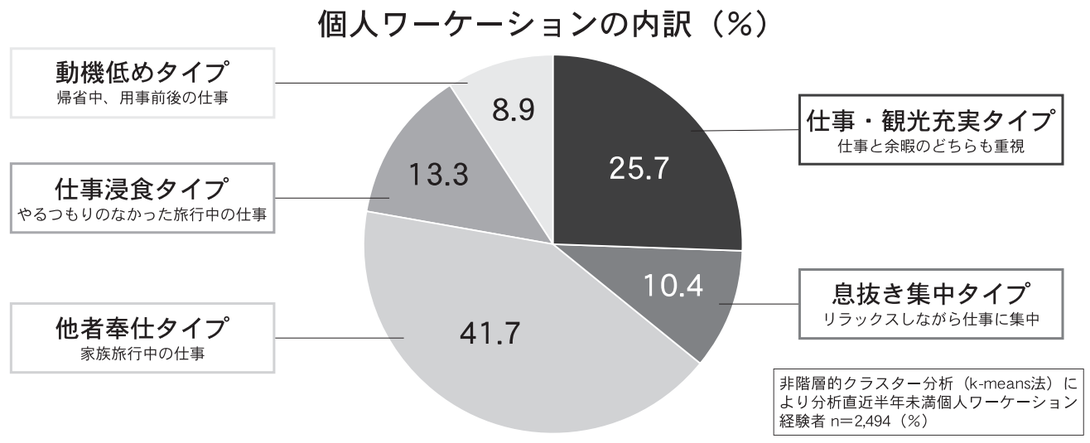
Qあなたはこれまでに、「普段の職場や自宅とは異なる日常生活圏外の場所で、仕事（テレワーク）をしながら自分の時間も過ごした」経験はありますか。

Qその経験のタイプについて、一番最近のことを振り返り、最も近いものをお選びください。

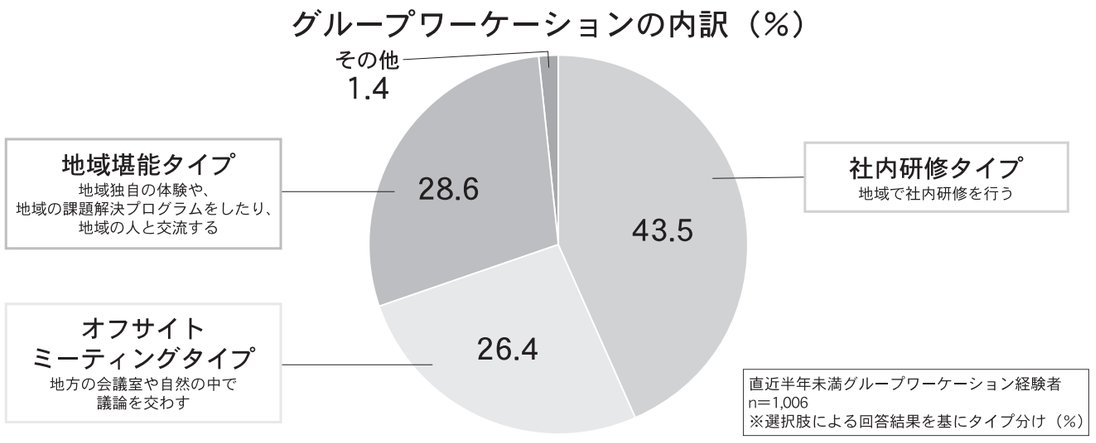


※令和2年国勢調査のデータより就業者の性年代構成比（5歳刻み）に合わせてウェイトバック処理

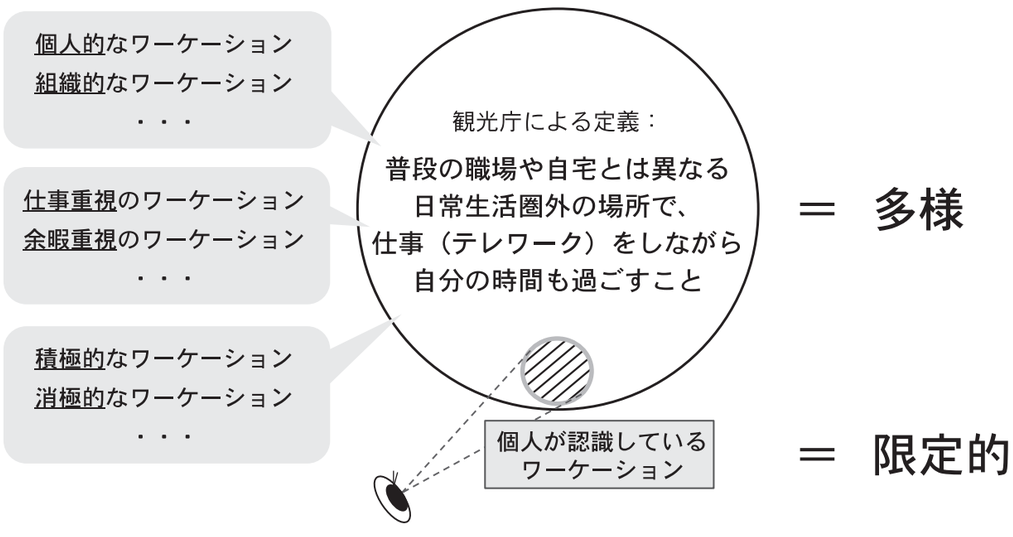
個人ワーケーションの内訳（%）



グループワーケーションの内訳（%）

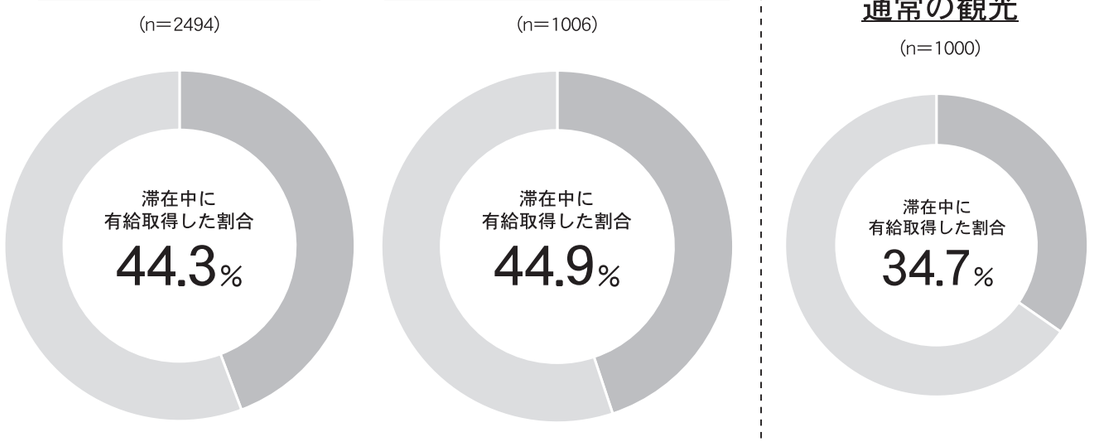


観光庁の定義に基づく「ワーケーション」の中には、多様なタイプが内包されている。就業者個人が認識しているワーケーションは、そのうちの一部しか捉えられていない可能性が示唆される



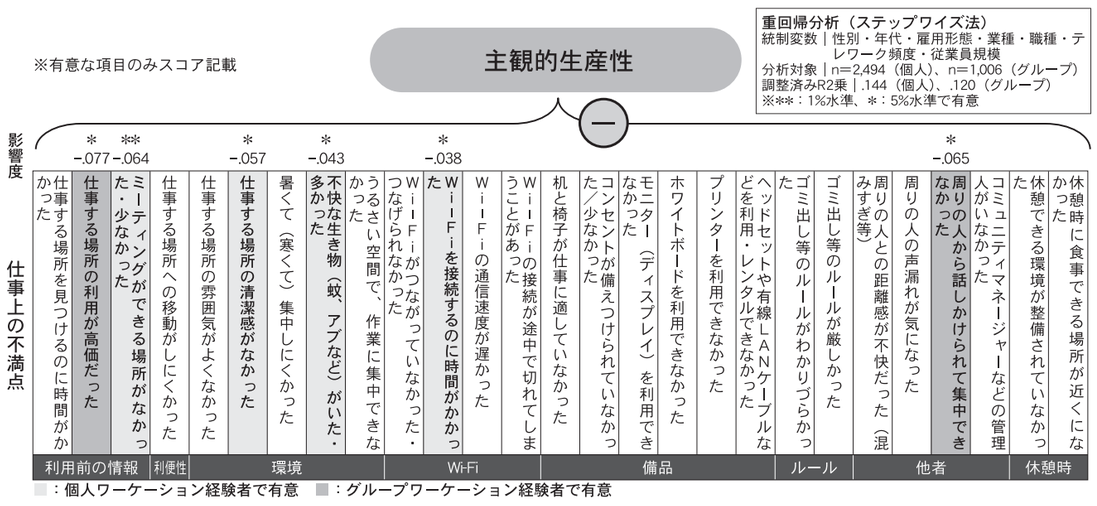
滞在中に有給休暇取得した割合（有給休暇取得日数÷滞在期間日数）

※カッコ内はn数



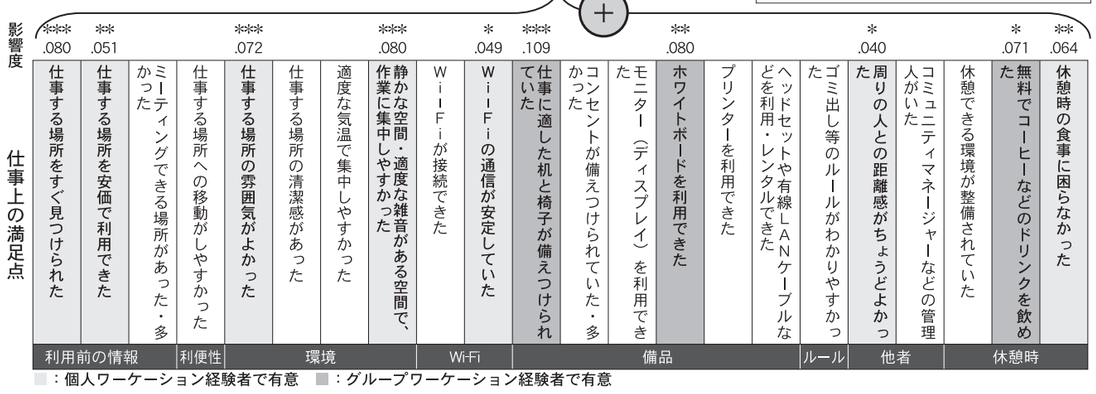
主観的生産性と仕事上の不満点との関係

※有意な項目のみスコア記載

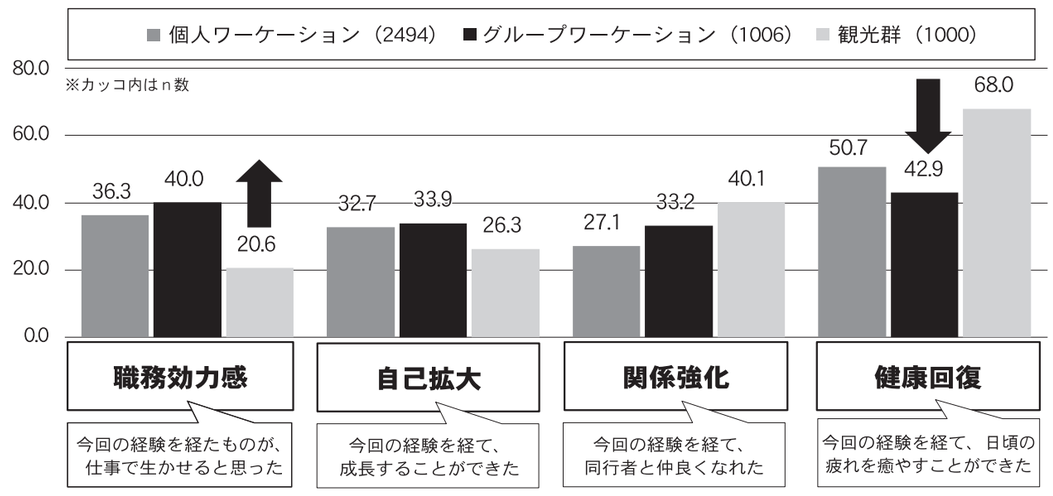


主観的生産性と仕事上の満足点との関係

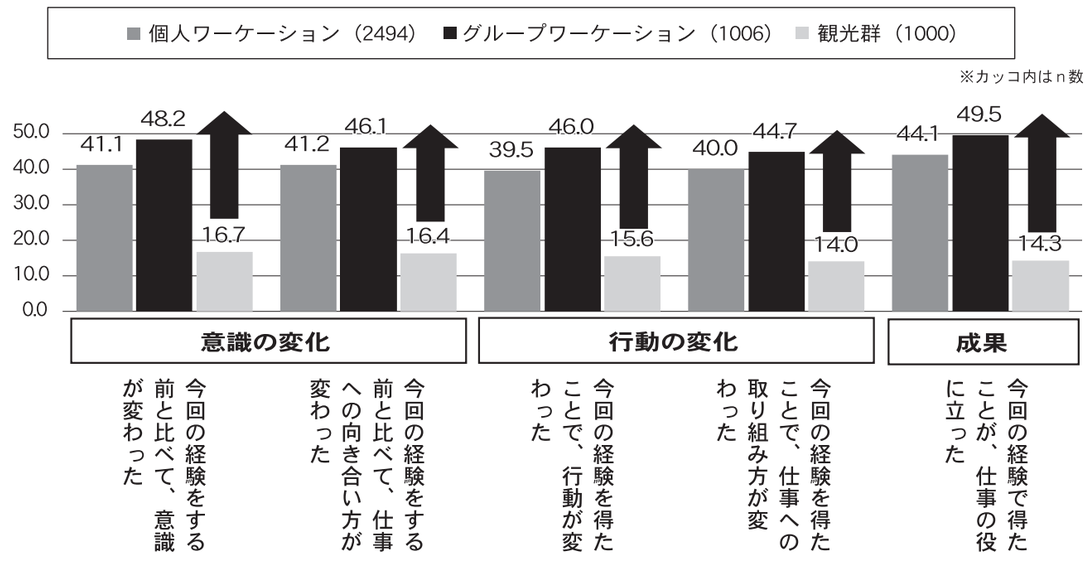
※有意な項目のみスコア記載



ワーケーション中（旅行中）に感じたメリット（あてはまる計／%）



ワーケーション・旅行後の仕事における意識・行動の変化、成果（あてはまる計／%）



調査データ